

【実践報告】

チームを組んでの学校不適応児童への援助 —学級集団の教育力を生かして—

藤村 一夫*

河村 茂雄**

本事例は、スクールカウンセラーが配置されていない学校現場において、学級担任と報告者がチームを組んで学校不適応児童へ援助をした報告である。学級生活満足度尺度や、担任の日常観察や個人的な資料をもとに複数の教師によって多面的なアセスメントを継続することにより、担任の共感的な対応が促進され、それによってA児やA児の母親とリレーションを形成できたのはこの事例の大きなポイントであると考えられる。また、A児を取り巻く学級の児童をも含めた集団の教育力を生かした援助により学級の児童のリレーションを形成したことが、A児はもちろん他の学級児童の学校生活に対する適応状態を良好にしていっていったと考えられる。個々への対応を学級集団を通して行うことは、小学校においては効果的であることが示唆された。

キーワード：チーム、学校不適応児童、学級集団

【はじめに】

河村（2007）は、現代社会の影響を受けている子どもたちについて、価値基準の崩れ、生き方の多様化に加え、家庭のしつけや社会参加体験の不足により、心理・社会的発達がうまく進まず自己の確立が難しくなっていることを指摘している。

そのため学校現場では、学校不適応児童生徒に対する指導援助が加速度的に困難さを増し、学級担任一人では抱えきれない大きな問題となっている。

佐々木・荻間澤（2009）はスクールカウンセラーによる学級経営への支援についてケース報告をしており、スクールカウンセラーが介入し、チームで対応していくことにより、適切なアセスメント、学級担任への心理的援助、学級状態への影響など有効性が認められたことを指摘した。

しかし、スクールカウンセラーの常駐は実現していない教育現場が多く、依然として学級担任が中心となって対応している状況がみられる。問題の発見、アセスメント、支援など、問題事例に対する一連の教育援助のほとんどを学級担任が行うということは、物理的

に不可能な部分が大いばかりでなく、多面的な理解対応が推進されない危険をはらんでいる。学級経営に必要なのは適切な児童理解であり、そのためには多面的な理解が必要である（藤村・河村，2001）。すなわち、河村（2000）も指摘しているように、学校不適応等に対する援助体制を学校組織の事情や状況に応じて作りだし、学級担任を支援しながら問題事例に対応していく必要があると考えられる。

さらに集団体験の少ない児童生徒に対して、社会性を高め、自己の確立を促進していくためには、学級集団の教育力を生かしていくことが求められる（河村，1999）。

本事例は、スクールカウンセラーが配置されていない学校現場において、報告者がコーディネートをして学校不適応児童へ援助をした報告である。この援助は、河村・田上（1997）が開発した学級生活度満足度尺度の結果を中心にアセスメントを行い、学級集団の教育力を生かして推進していったものである。

【事例の概要】

1. 対象者の問題の概要

A児（小学3年生）

* 茨波町立日詰小学校

** 早稲田大学 教育・総合科学学術院

199X年1月、担任(30代女性)から報告者(生徒指導主事)に、A児に関する相談があった。担任の報告によればA児は、学級で学級委員長を務めたり遊びにみんなを誘ったりするなどリーダー的な存在であったが、感情の起伏が激しく些細なことでかっとなり、壁をたたいたり机を蹴ったりするなどの行為が見られた。また、いやなことがあると過剰なまでに気にして鬱的な状況になることがしばしばみられた。担任に対しても素直に接することができず反抗的な面がみられ、担任は対処に困難さを感じていた。

また、欠席が多くみられた。2年生のときには数日だった欠席が、3年生ではすでに20日を超えていた。母親から担任宛での連絡帳には、担任がA児に対して冷たく接しているように感じる、母子家庭のことを馬鹿にしてほしくないこと、A児が担任から嫌われていると感じているから、本人の気持ちが落ち着くまで登校させないことなどが書かれてあった。担任のどのような指導や接し方からそう感じたのか、具体的には書かれていなかった。

2. 対象児童についての心理教育アセスメントの焦点、方法と結果

(1) 心理教育アセスメントの焦点

心理教育アセスメントの焦点はA児本人の社会性の側面、A児を取り巻く環境としての学級・家庭、そしてA児と環境との関係、また担任とA児・母親との関係である。

(2) 心理教育アセスメントの方法

心理教育アセスメントの方法としては、質問紙法、観察法、面接法を採用した。A児の学級生活に対する認知を把握するために、質問紙法には学級生活満足度尺度(河村・田上, 1997)を使用した。観察の時はA児とのリレーション形成も目的として、担任が「関与しながらの観察」を行った。そしてA児に関するそれぞれの資料をもとに、担任と本報告者との2者でアセスメントを行い、A児を多面的に理解するように努めた。

(3) 心理教育アセスメントの結果

①A児の知能学習・健康・社会面

A児の小学2年生時の知能偏差値(図書文化)は50を超え、教研式目標基準標準学力検査 CRT (Criterion Referenced Test) (図書文化)においても国

語、算数共に、特に問題のない状態であった。しかし、4年生時には、知能偏差値が40を切るまでに低下していた。

特に持病はなく、遊び時間には体をよく動かして遊んでいたが、風邪や、体調不良のため欠席がみられた。

学級では、学級委員長になったり児童会の役員に立候補し当選したりするなどリーダーシップを発揮していた。しかし、感情的な起伏が激しく乱暴な言動がみられることがあり、まわりの友達も常に気を使っている状態であった。

②A児を取り巻く環境としての学級

学級生活満足度尺度の結果、承認得点13点、被侵害得点18点であり、学級生活不満足群に類別された。このことは、A児が安心して学級生活を送れていないことを意味している。他の児童のほとんどは学級生活満足群に類別されており、A児が孤立している状況も示唆された(Figure 1)。

担任によれば学級の児童は素直で教師を信頼し、友達同士仲良く活動することができた。しかし、何かと指図し高圧的に振舞うA児に対して、追従することも見られた。A児は担任に対しても安心して話す様子が少なく、何か失敗した時など沈み込み、友達や教師の慰めの言葉さえ聞き入れる様子はみられなかった。

③A児を取り巻く環境としての家庭

A児の両親は別居が続いており、A児が3年生の時に正式に離婚が決定した。長兄は、同時期に同級生の生徒との間で妊娠するなど、母親も精神的に不安定な状態であると判断した。

3. 心理教育的アセスメントに基づく教育援助の方針と計画

(1) A児の問題状況についての仮説

A児の問題状況は、急激な家庭環境の変化から情緒的な不安定さが背景にあり、学級において友人関係における欲求不満が原因であると考えられた。友達に対してリーダーシップをとり、まわりの友達はある程度自分の思い通りになっているが、自分の弱さをわかってもらったり、うちあげたりする友達がないため、それが学級生活満足度尺度における不適応状態を示す結果に結びついたのであると判断した。そしてその不安感が友達に対する高圧的な態度に表れると考えられた。担任もA児の対応に苦慮しなかなかA児に対して積極

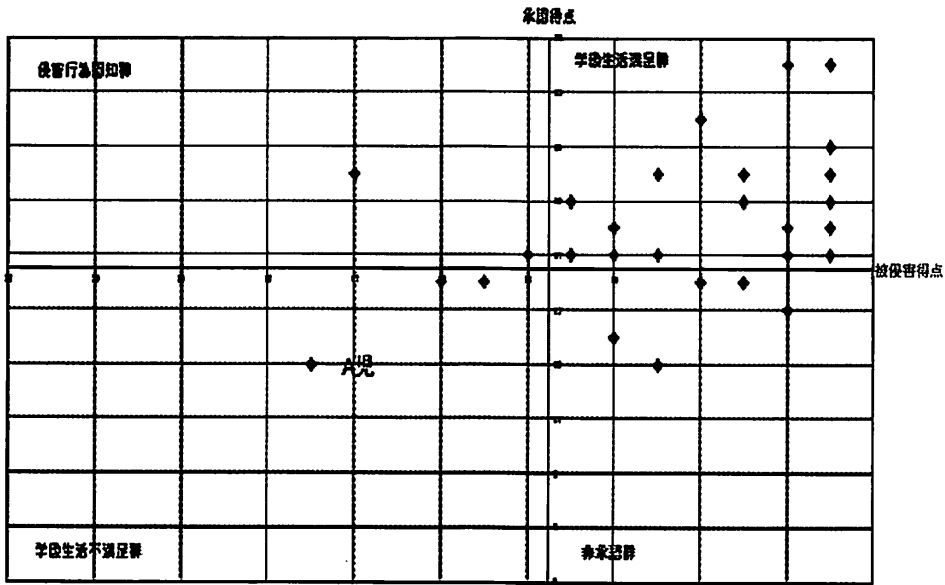


Figure 1 学級の状態図

的に関われない状態であり、それによってA児が担任の指導に素直に応じられない状況を生み出していると考えられた。そして母親はA児から話を聞いているうちに担任への不信感を募らせたのではないかと推察された。これらのことから、家庭環境の問題を背景として、母親と担任の関係、A児と担任の関係、他の児童とA児との関係は、すべて関係していると推察された。

(2) 心理教育援助の基本的な方針

(1)のアセスメントから、報告者は、担任にできることはA児に学校生活で満足感を味わわせながら学校生活に適応させていくことが基本であると考えた。同時にA児の変容によって母親と担任との関係も親和的なものにしていくことが重要であると考えた。そこで、まず、学級集団の活動を通してA児と学級の児童とのリレーションを深め、本音で、しかもあたたかい交流ができるようにすること、また担任とA児とのリレーション作りを第1の方針とした。

第2の方針は、母親と担任との関係作りである。担任は家庭環境については一方的に介入できない立場であるから、担任と母親との面接においてはA児のポジティブな面を伝えたり身近な話題にふれ担任が自己開示をしたりしながら、母親と担任とのリレーションを形成し、母親を担任が精神的にサポートすることとした。

第3の方針はA児に自己主張を中心とした社会的スキル訓練を行い、他の児童に高圧的な態度にならずに自分の思いを伝えることができるようにすることとした。すなわち、A児に関わる問題は、家庭環境の問題が大きな背景として考えられるが、学校でA児の情緒的に不安定な状態を改善していくことをねらいとした。これらの方針に基づいた具体的な心理教育援助は、報告者と担任が協議しながら、担任が行うこととした。

(3) 教育援助の具体的計画

①初期 (A児と担任・学級集団とのリレーションを形成する段階)

A児と学級集団とのリレーションを形成するために、教科や学級活動の中に構成的グループ・エンカウンターを取り入れる。担任はA児との接触の機会を増やし、母親的な態度で接していく。

母親とは学級通信で間接的に担任の学級経営の方針やA児のポジティブな面を中心に情報を与えるようにする。

②中期 (A児を情緒的に安定させ、母親とのリレーションを形成する段階)

報告者と担任が面接のねらいや方法を確認しながらA児と担任との個別の面接を行い、A児に暖かく接することで担任に対する不信感や不安を軽減する。同様に母親とも面接を展開し、担任が身近な話題をもとに

自己開示しながらリレーションを形成する。

③終期（A児が学級の児童に対して本音で交流できるようにする段階）

自己主張訓練を中心とした社会的スキル訓練を導入しA児が学級の児童に対して高圧的な態度にならないで本音の交流ができるようにする。同時に学級の児童もA児に対して本音の交流ができるようにする。

4 教育援助の概要

(1) 初期（A児と担任・学級集団とのリレーションを形成する段階、199X年1月～5月）

A児と学級集団とのリレーションを形成するために、担任は構成的グループ・エンカウンターを導入した。その内容は小グループのメンバーを頻繁に変えながら簡単なテーマで討論する内容が多く、特に傾聴するというルールを徹底して行った。A児は討論に興味を示し楽しく参加すると同時にメンバーの一人として友達の話の黙って聞くことが徐々に定着するようになっていった。しかしふだんの生活では自分の主張が通らないと精神的に不安定に陥ることがまだ見られた。図工の作品鑑賞会をふれあいのあるものにしようと、友達の話に対してメッセージカードをおくる活動を行った。A児は欠席していたので感想を友達に書いてあげることができなかったが、後から数名の友達からもらったメッセージカードを見て、驚きとともに満足していたようであった。

担任は以前よりもA児との接触を増やした。授業中は肩に手を置くなどのスキンシップをとったり、休み時間にも積極的に話し掛けたりするなどかわりをもつようにした。

母親とは面談をすることは少なかったが、学級通信でA児や学級の活動を知らせた。A児が行った奉仕活動や、掃除を積極的に取り組もうとする姿など、A児のポジティブな面を数多く紹介した。A児だけが特別視されているという印象をさけるために、他の児童もおなじように学級通信に取り上げるという配慮もなされた。その結果、電話での母親との話の中で学級通信に関することが取り上げられるようになり、一時は担任に不信をあらわにした母親も学年末と翌年度はじめの懇談会では、A児にはつらい思いをさせているのかもしれないなど、担任に打ち明けるようになっていった。

(2) 中期（A児の不安を軽減し、母親とのリレーシ

ョンを形成する段階 199X年5月～8月）

5月、A児が鉛筆をへし折り泣いている。担任がどうしたのか聞いても、言いたくないという。その日のことを夕方母親に連絡したが、特に変わった様子はないという。その夜母親より電話があり、隣の学級の教師に叱られたのが非常に恐かったらしい。「隣の先生のことなら安心していいよ」とA児に伝える。隣の学級担任が直接電話を入れると、母親も少し安心したらしく「私がじっくり話すので、先生は心配しないで下さい」と返答した。

6月、担任とA児との間で少しずつコミュニケーションが図られるようになった。A児は児童会執行部に所属しているが4年生はA児一人だけであるため、孤独感を味わっていることを担任に打ち明けた。A児の話をつきと聞き、児童会担当の教師に支援の協力を得てA児に以前より多く話し掛けてコミュニケーションをとるようにした。

7月、「次の漢字ミニテストはいつか」と担任に聞きに来る。「絶対に100点をとりたい」とのことであった。本人は漢字が苦手であったが、同様に苦手としている児童と点数の競争をするようになった。友達と同等の立場でつらさを共有して共に克服するよい経験であると判断し、担任は漢字の取り組みを評価した。A児は友達と関わりながら学習に意欲を見せるようになった。

7月は病欠1日だけとなり、児童会の活動も積極的に行うようになる。児童総会では、全校の前で3回も発言し、その内容は学級通信でも取り上げた。

学期末の母親との面談では、A児がずいぶん落ちてきたことをうれしく思い、担任に感謝していることを告げた。夏休み中、担任は、A児が抵抗を示さない程度の軽い話題をもとに電話をかけながらのコミュニケーションをもった。A児は、学校のプールにも遊びに来るなど、安定した生活が過ごした。

(3) 終期（A児が学級の児童に対して本音で交流できるようにする段階 199X年8月～12月）

担任とA児との関係、母親との関係がよくなったが、A児が学級の児童に対して高圧的に振舞うことは依然としてあり、A児を取り巻く児童もA児に対して自己主張できない面が見られた。そこで、ロールプレイによる自己主張トレーニングを導入し、その後の学級生活においても友達に対する言い方や自分の思いを伝え

る大切さについて意識して指導を行った。A児が自分の過ちを素直に認めるとそれをとりあげて評価し、言い方がきついような時には個別に話し合うように心がけた。A児を取り巻く児童はA児に対して自己主張できるまでには至らなかったが、A児本人には少しずつ変化が見られた。A児の友達に対する高圧的な態度について担任がたしなめる時など、担任の話に素直に応じるようになり、自分の過ちも納得して認めるようになった。

11月、母親の仕事の関係で隣の学区に転出することになった。A児の希望もあって、2学期末までは転校せずに学区外から登校することにしたが、度重なる環境の変化に再び精神的不安定に陥り、12月には欠席が11日にもなった。数少ない登校日の最後の日、学級全員でA児に対しておくれた寄せ書きを読んで、A児が声を出して泣いていた。

その後、担任は転出先に数回訪ね、A児の様子を見に行ったが、新しい学校生活に適応し、正常に通学している状況であった。

5. 教育援助の評価

担任と報告者両名による児童理解を通して、担任のA児に対する見方が共感的・多面的に変容していった。A児を日常観察とあわせて、学級生活満足度尺度をもとに集団の中の一員として理解することで実はA児が孤独感を味わっていたことや、家庭環境の急激な変化による精神的な不安定に陥っていたことを明らかにすることができた。これによってA児に対して一面的な理解から多面的な理解ができるようになり、そのことで担任はA児に対する指導の見通しを持ち指導行動も柔軟かつ適切になっていったと考えられる。担任と母親との関係においては、お互いに直接面談することに抵抗があったため、学級通信を数多く出しA児の変容を事実で示しながら時間をかけて間接的な理解を求めたことが、効果的であり、母親は担任が自分の子どもを温かくみていることを感じていったと考えられる。A児と学級集団との関係においては明らかな変容は見られなかったが、A児自身が自分の威圧的な行動に気づき、直そうと意識するようになったのは評価できる。学級生活満足度尺度による調査は、援助の各段階で行われたが全体的には満足群が多い状態であった。これは、担任がA児を特別扱いせず、学級の児童を平等

に評価しつづけてきたことや、構成的グループ・エンカウンターの導入で学級成員のリレーション形成を継続したことによると考えられる。

結果的にA児は転校してしましたが、担任の児童理解の視点が多面的で共感的に変容したことや、それによってA児やA児の母親とリレーションを形成できたのはこのケースの大きなポイントであると考えられる。

【考察】

國分(1987)は、児童理解においては診断的理解と共感的理解の両方ができることが望ましいとしている。しかし学校現場の多忙化によって日常的に診断的な理解ができない状況にあるし、たとえば客観的な調査を行ったとしてもそれをもとにアセスメントする環境が十分であるといえない。本ケースでは、報告者と担任がチームを組み、教師が簡単に調査できる学級生活満足度尺度や、担任の日常観察や個人的な資料を生かして担任が無理のない程度の実践を行ったことが有効であったと考えられる。

河村(1999)は、集団には教育力があり集団を生かして個を育てる重要性を指摘している。本実践においてはA児を取り巻く児童をも含めた支援援助であり、そのために構成的グループ・エンカウンターをはじめとする集団を生かした教育が有効であったと考えられる。問題を抱える児童だけに焦点をあてて個別に指導するだけではなく、個々への対応を学級集団を通して行うことは、小学校においては効果的であることが示唆された。

今後、学校現場で教員同士がケースを検討しあい効果的な指導援助ができるようなチーム作りや、学級集団と個の状態のアセスメントや具体的な対応など、さらに実践を通して研究をしていく必要がある。今後の課題としたい。

【引用文献】

- 藤村一夫・河村茂雄 2001 学級生活に対する児童認知とそれを推測する担任教師の認知とのずれについての調査研究 カウンセリング研究, 34, 284-290.
- 河村茂雄 1999 学級崩壊に学ぶ 誠信書房

- 河村茂雄 2000 学級経営コンサルテーションガイド 図書文化
 河村茂雄 2007 データが語る②子どもの実態 図書文化
 河村茂雄・田上不二夫 1997 いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, 30, 112-120.
- 國分康孝 1987 学校カウンセリングの基本問題 誠信書房
 佐々木佳穂・荻間澤勇人 2009 スクールカウンセラーによる学級経営への支援 カウンセリング研究, 42, 322-331.
- (2011年8月30日受稿, 2012年1月16日受理)

*“Teamwork Help” for a Maladjusted School Child
 : Making the Most of Educational Effects in the Classroom as a Group*

Kazuo Fujimura (Hidume Elementary School), Shigeo Kawamura (Waseda University)

This is a case study in which a classroom teacher and the author, as a team, helped a maladjusted pupil cope with school life. The school had no school counselor; in order to help Pupil A, multiple teachers created a many-sided assessment using a classroom satisfaction scale, the homeroom teacher's observations, and personal data. This encouraged the homeroom teacher to react sympathetically and, accordingly, a good relationship was created between us and Pupil A and his mother. This was an important element in this case study. Our relationship with the pupils improved by means of teamwork help, which also had an effect on A's classmates. Not only A's adaptability and adjustment to school life but those of all the students were improved. This case study suggested that it is more effective helping one student by dealing with the classroom as a whole than one on one at the elementary level.

Key Words: teamwork help, maladjusted pupil, classroom group activities